

人の魅力が地域の魅力

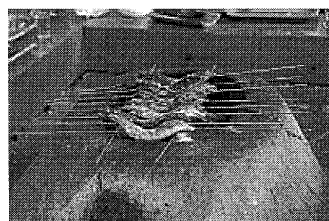
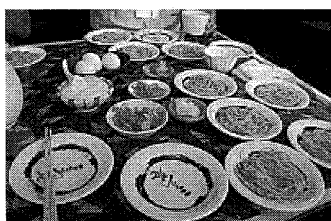
長野県松本地方事務所 産業労働チーム
林 宏 吉

開催日：平成17年9月28日～29日

内 容：

- 1 蕎麦によるまちづくり － 出石（いづし）の町並み見学
- 2 但東（たんとう）自然ふれあいセンター「やまびこ」：宿泊・交流会
- 3 兵庫県立コウノトリの郷公園視察
- 4 山女料理阿瀬：現地研修
- 5 車中研修

「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会」研修旅行 PART 3 レポート



松本大学のオープン・カレッジ「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会」の第3回は、兵庫県豊岡市出石町・但東町・日高町阿瀬を研修会場に実施されました。

この学習会シリーズは、「講演会+現地ツアー」で実施されています。

研修旅行 PART 3 は平成17年6月24日の座談会「農山村レストランのモデル＝究極の女性グループ活動 －お酒以外は買わないレストラン経営－」（講師：「山女料理 阿瀬」中西禮子氏、地域づくりの神様 森正氏、聞き手：松本大学地域総合研究センター研究員 玉井袈裟男氏）を受けての現地ツアー。

その概要をレポートします。

1 蕎麦によるまちづくり - 出石（いづし）の町並み見学

兵庫県の北東部に位置する出石町。町の歴史は古く、古事記にもその名が。江戸時代には仙石氏五万八千石の城下町として栄える。町家作りの古い家並が軒を連ね、その落ち着いた佇まいはまさに”但馬の小京都”。

右の写真は町の南部、かつての出石城・大手門跡に建つ辰鼓楼（しんころう）。

町の大時計として親しまれている辰鼓楼は、旧藩時代、辰の刻（午前八時）に太鼓を打ち鳴らし藩士の登城を告げる太鼓櫓であった。現在は、朝と昼、夕方の三回、太鼓と鐘の音で町民に時を知らせている。

この地に建てられおよそ百三十年。町民の手により何度も修復を繰り返しながら時を刻み続けてきた。出石は今、町のシンボル・辰鼓楼を中心に年間約百万人の観光客で賑わう。



堀川妙子さんは、自分の生まれた出石で観光ガイドの仕事をして二十年以上。連日、多くの観光客を相手に町の見どころをおもしろおかしく紹介している。幼い頃から大好きだったという辰鼓楼の説明には、特に力が入る。季節によって、時間によって、見るたびに表情を変えるのが辰鼓楼の魅力だと言う。



*名調子に乗せられて、辰鼓楼だけでもアングルを変えて10枚近くシャッターを切ってしまった。ただ面白いだけではない。町のすみずみまで熟知していて、いろんな視点・角度から出石の魅力を引き出してみせる。そして、なにより町への深い愛情を感じる。

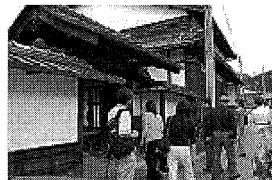
この町の最大の観光資源は、この人なのかもしれない。



夏は佃煮にしたいほど(?)の
蛍が乱舞するとか



51軒目のおそばやさんを建築中



通りごと、建物ごとに物
語が



こんな味わい深い赤い土
壁の酒蔵も

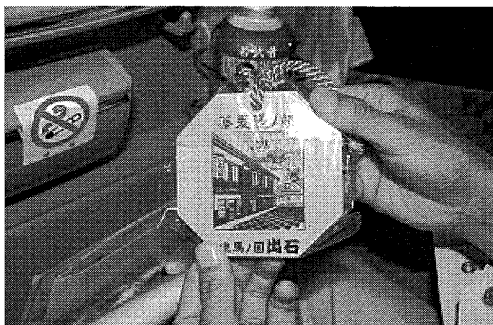
出石皿そば

その歴史は古く、宝永3年（1706年）に信州上田から国替えになった仙石氏により伝来したといわれる。お店での注文は至ってシンプルで、何人前かを注文するだけで出石焼の小皿に盛られたそばと、薬味、徳利に入っただしが運ばれてくる。

出石焼

透きとおるような白を特徴とする白磁。その歴史は日本書紀の時代までさかのぼる。柿谷陶石と呼ばれる純白の原料を使って焼かれ、その神秘的なまでの白さは他に例を見ないほど。陶工の磨かれた技が生み出す絹のような風合いと繊細な彫刻は国の伝統的工芸品に指定されている。





食べ終えた皿を重ねて、割り箸の高さを超えると記念品がもらえる。少し余分に食べすぎてしまいそうかも。



2 但東自然ふれあいセンターやまびこ

今回の宿泊場所。温泉館、心地良い汗を流せるスポーツ施設（こどもから大人まで誰でも簡単にチャレンジできるフィールドゴルフやテニスコート、多目的グラウンド、サイクリング、雨天ゲートボール場など）スポーツ施設を併設、豊かな自然の中にある。

温泉は、地下1,100mの古代花崗岩から湧き出る天然温泉は高成分で、まさに自然からの贈り物。肌がつつるになると評判、とのこと。



*それぞれの枕元には俳句を添えた手紙（それぞれが違う文面）と折り鶴が置かれ心温まる演出。翌朝、出立の際もバスが見えなくなるまでずっと旗を振って見送ってくれた。

夜の交流会は、一般の参加者、松本大学の学生さん、大学の先生・事務局などみんないっしょのなかなか経験できない集い。

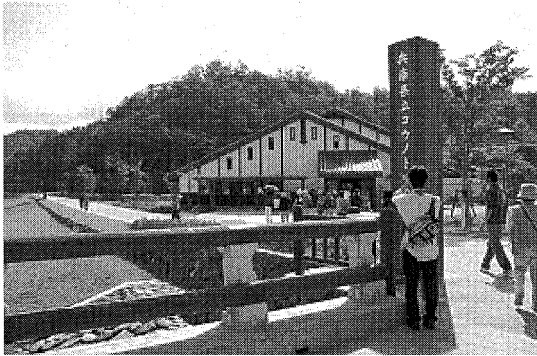
参加者のみなさんは長野県内各地から集まったそれぞれ地域づくりに取り組まれ、造詣の深い方たちばかりで、良い意見交換・情報交換の場になったように思う。



朝、部屋の窓から。のどかな風景。霧が多そうだ。→

但東町は、9割が山林とのこと。長野県内だと筑北あたりとどこか似た雰囲気がある気がする。

3 兵庫県立コウノトリの郷公園視察



【施設の理念】

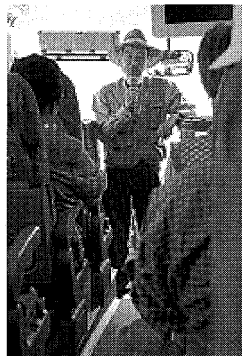
国の特別天然記念物でもあるコウノトリは兵庫県の県鳥。県では、日本最後の生息地となった但馬地域・豊岡市で昭和40年人工飼育を開始するなど、地域住民の協力を得ながら、長年にわたりコウノトリの保護・増殖に努めている。

この公園は、野生化の可能性をも含めた新たな視点に立ち、人とコウノトリの共生できる環境と学習の場を提供することを目的として整備された施設である。

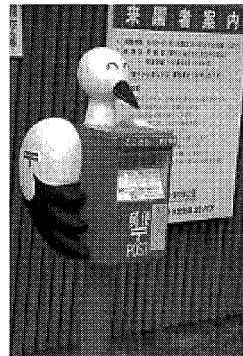


コウノトリの保護・飼育・増殖、野生化に向けての研究や環境づくりなど多様な事業に取り組んでいる。

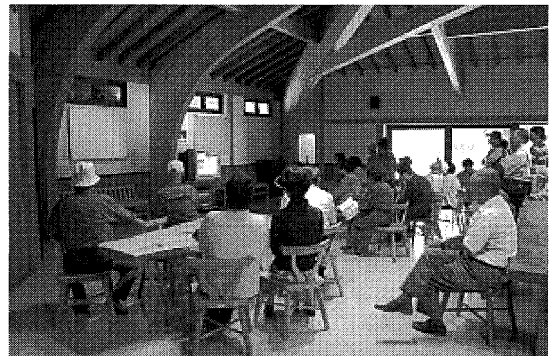
人々の関心が環境問題に向かい、物質的な豊かさから心の豊かさへと価値観が変化しつつある今日、人と自然との共生できる地域環境こそが真に人にとって、「豊かな自然」であり文化であると園長は述べている。



現地では、地域づくりの神様、森正先生（兵庫県花と緑のまちづくり研究所副所長）と合流。



公園内はポストもこんな感じ



コウノトリ文化館内には映像資料の閲覧スペースも。



この地域では「ツル」と呼ばれるそうなの。なお、ほんとの「鶴」は木にとまれないとか



それでは、日本画で木にとまった「鶴」は実はコウノトリ？



コウノトリの巣。大きい。



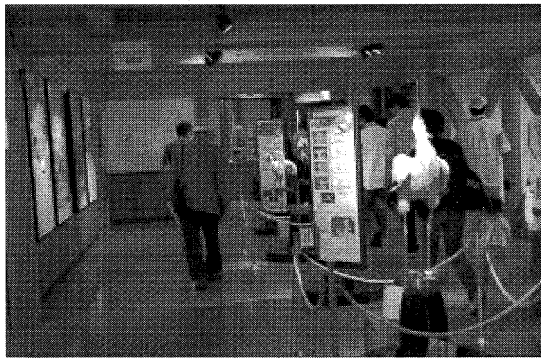
あまり動かない。写真には撮りやすい。



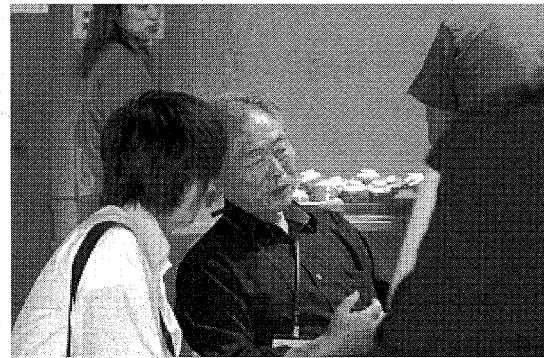
生産者の名前入りで売ってました地元の農産物



ちなんだこんなお土産もお約束。もちろんお菓子もある。



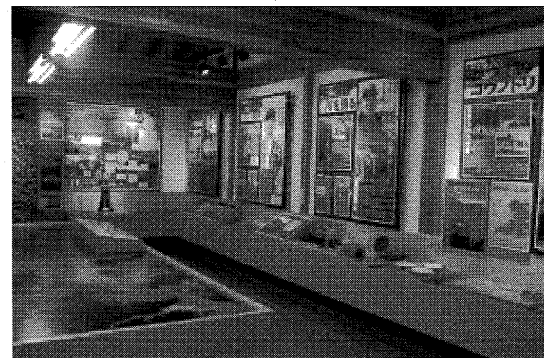
館内には剥製も。真似して上を向いてみたら笑われたが…(^^) ;



松本大学・玉井袈裟男先生。多彩で広い人脈は松本大学の宝

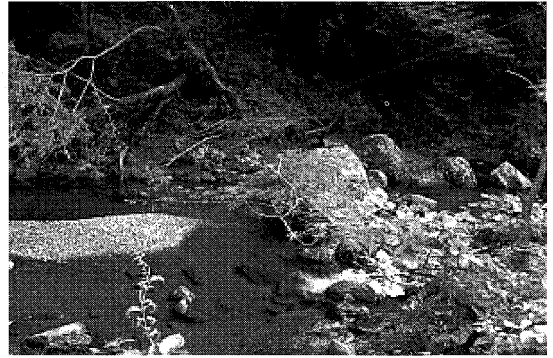
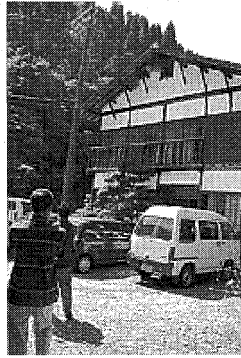


当日は2回目の放鳥前。ニュースでもやってとてもタイムリー

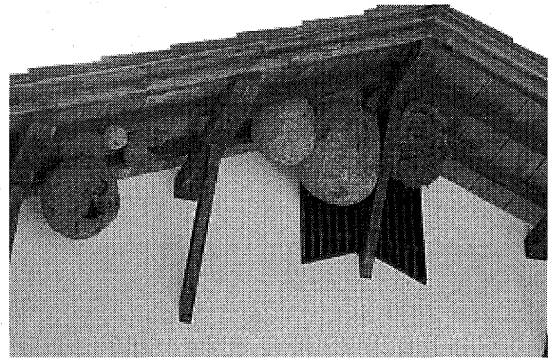


地域の思いを伝える展示室

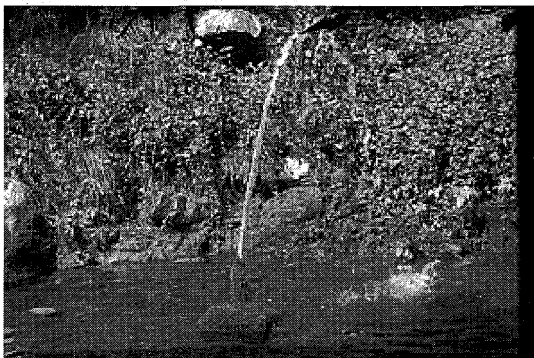
4 山女料理 阿瀬：現地研修



今回の研修旅行のメインの視察地。6月24日の松本大学での講演を踏まえての現地視察。
 溪流沿いの、いい感じにひなびた佇まい。それほど山深くはなく、都市部からも割に手軽に日帰りでき
 そうである。
 大きなスズメバチの巣もあり、裏庭からは噴水の水音も。古い民家風の外観。



山女料理 阿瀬：〒669-5359 兵庫県豊岡市日高町金谷 TEL：0796-44-0723



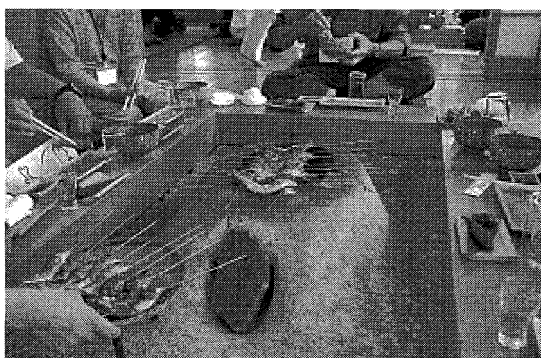
内装はまだ新しく、明るい感じだ。
 泊まりは、ない。
 負担が大きくやめたのだという。
 なんのために働くのかを見失わないことは、なかなかできそうではない。
 もともとこの店は溪流づたいのこの地域でそれぞれがばらばらに仕事をしてたのではさびしいと思い始めたとのことである。
 幸福のためにここでの仕事はあるのだ。



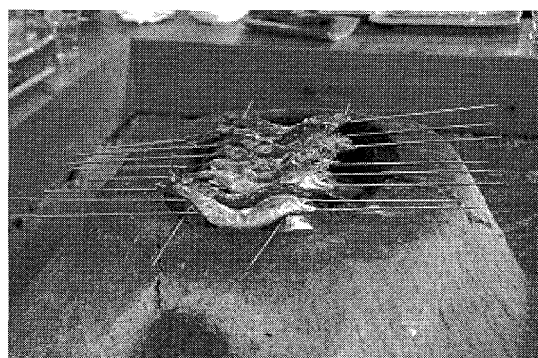
焼き上がるのを待つ間は話はずむ。
囲炉裏を囲むと、なぜか打ち解けた感じになる。



突き出しをつまんでいる間に山女（ヤマメ）が焼き上がっていく。

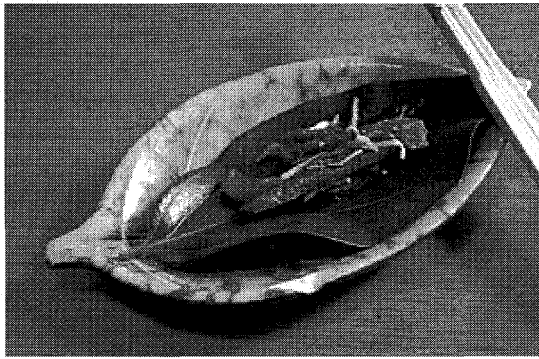


生産者の名前入りで売ってました地元の農産物

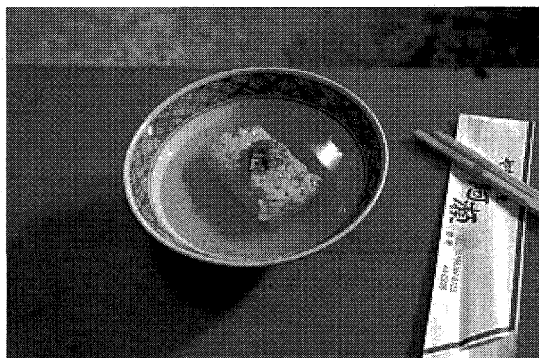


「田舎臭い」と「田舎ならではの」の違いはこの風流心か。
地のものだけを使った料理はみなどこか洗練を感じて美味しい。
町場の料亭の主人なんか面白がっていろいろ教えるのを素直に試しているのだそうだ。
素材は長野にないものは何ひとつない。

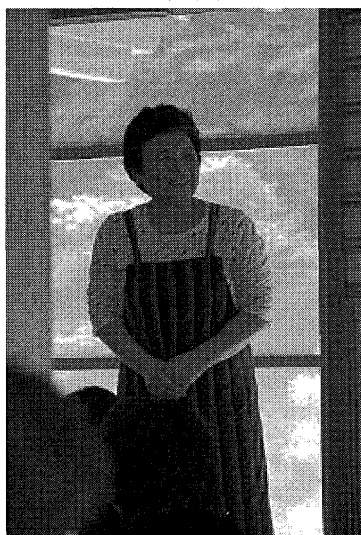




干し柿も刻んで生姜とあえ、柿の葉にのせて。



すごい品数で、もう食べられない、と誰もが思ったところへこの炊き込みご飯。これはさすがにお持ち帰りになった。

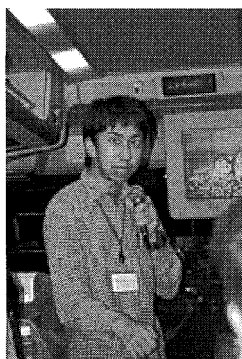


中西禮子さん。6月の講演のときにはやや堅い感じだったが、さすがホームグラウンド。仲間の皆と楽しそうに店を営んでいる雰囲気伝わってくる。



お客さんが来てくれればうれしいし、来なければみんなでおしゃべりができて楽しいとのこと。人生の達人だ。

5 車中研修



帰途の車中研修は研修の感想などはもちろん、カラオケありトークあり。なにしろ片道八時間も
ある。時間はたっぷりだ。

…と思っていたが、長野県内に入るころには何やら名残惜しくなってくる。袖触れ合うも多生の
縁とか。またどこかでお会いしたいものだ。

長野県下各地で地域づくりの現場で活躍中のみなさん、松本大学のみなさん総勢31名。実際に
それぞれ工夫・ご苦労されている方の言葉は説得力がある。こちらの話すこともすぐに理解してく
れた。

また、学生さんたちがみな借り物でない自分の言葉で考え話すことができる。なかなか頼もし
く、感心した。

“人にも「風」の性と「土」の性がある。風は遠くから理想を運んでくるもの。土はそこにあっ
て生命を生み出し育むもの。土は風の軽さを噛み風は土の重さを蔑む。愚かなことだ。集って風土
の文化を生もうとする。”（風土舎創立宣言から）

玉井袈裟男先生曰く、私たち公務員は「風」なのだそうである。

土に向かって吹く風となり、和して文化を生みだしたいと思う。



↑ この二人は後日こちらの事業
にも参加してくれた

上記は、Web サイト作成者である林氏にご了承いただき、本研修会に関する報告書の部分を転
載させていただいた。